

2015 年度 小委員会活動成果報告

(2016 年 2 月 15 日作成)

小委員会名	感覚・知覚心理小委員会		主 査 名：土田 義郎 就任年月：2015 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (環境心理生理運営委員会)		委員長名：羽山 広文 主 査 名：(西名大作)
設 置 期 間	2015 年 4 月 ～ 2017 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>学会には個々の研究者の努力により、心理・生理分野の多様な研究成果がある。また、最近は学際性の高い研究の重要度も増している。情報学、医学、農学、土木工学などとの連携によって発展する分野があることも疑いの余地はないだろう。このような取り組みは新しい研究の地平を拓くものであると信じ、本小委員会では下記に示す 2 点を使命とする。</p> <p>(1) シンポジウムを開催し、テーマに沿った議論を深める。発表者、聴講者の研究推進に寄与するとともに、実社会へ活用できる知見の社会的な発信を図る。</p> <p>(2) 実験手法や評価法に関する研究会を開催する。初学者の研究推進に役立てるとともに、心理生理的研究の底上げを図る。</p> <p>2015 年度の活動計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学会内外における研究の動向把握 ・シンポジウム開催 <p>2016 年度の活動計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学会内外における研究の動向把握 ・シンポジウム開催 ・研究状況の総括と当該分野における展望の提示 		
委員構成 (委員名 (所属))	<p>委員公募の有無： 無</p> <p>主査：土田義郎 (金沢工業大学)</p> <p>幹事：竹原広実 (京都ノートルダム女子大学)、光田 恵 (大同大学)</p> <p>委員：竹村明久 (摂南大学)、松原斎樹 (京都府立大学)、山中俊夫 (大阪大学)、西名大作 (広島大学)、梅宮典子 (大阪市立大学)、澤島智明 (佐賀大学)、秋田 剛 (東京電機大学)、原田昌幸 (名古屋市立大学)、宮本征一 (摂南大学)、合掌 顕 (岐阜大学)、原 直也 (関西大学)</p>		
設置 WG (WG 名：目的)	<p>新領域展望 WG：シンポジウムのための研究サーベイ</p> <p>評価・実験法 WG：実験法や評価方法に関する情報共有と活用の検討</p>		
2015 年度予算	109,000 円	ホームページ公開の有無： 無 委員会 HP アドレス：—	

項 目	自己評価
委員会開催数	4 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は 除く)	1. 心理と環境デザイン—感覚・知覚の実践— (技報堂出版)
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会 承認企画	<p>1. 心理生理のフロンティアを語る (第 3 回)「音の知覚と公共空間デザイン」 同名資料 参加者数 36 名</p> <p>2. シンポジウム「感覚・知覚と環境デザイン」 同名資料 参加者数 53 名</p>
大会研究集会	
対外的意見表明・パ ブリックコメント等	

<p>目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)</p>	<p>当初設定した活動計画に対して以下のような成果を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. WG を活用して広く研究動向をとらえる試みを行っている。 2. 2つのシンポジウムを開催できた。 <p>シンポジウム「音の知覚と公共空間デザイン」では、25%の方が会員外や後援団体からの参加者であり、従来環境心理系の研究会には参加されていなかった方もある程度参加いただけた。</p> <p>シンポジウム「感覚・知覚と環境デザイン」学生の参加が 20%を占め、今後も方法論に関わるテーマについて初学者向けの催しの必要性が高いことが示唆された。</p>
<p>委員会活動の問題点・課題</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. シンポジウムが結果としてほぼ同時期に 2 つ行うこととなり、委員会としては業務が輻輳する事態となってしまった。 2. 昨年度の反省を踏まえ、シンポジウムの開催時期を 10 月とした。ある程度参加しやすい時期とすることができた。

環境工学委員会用 自己評価欄

2015 年度 小委員会活動 自己評価

(**中間年度評価**・最終年度評価)

<p>総合評価 (4 段階評価)</p>	<p style="text-align: center;">(A)</p>	<p style="text-align: center;">B</p>	<p style="text-align: center;">C</p>	<p style="text-align: center;">D</p>
<p>総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)</p>	<p>活動計画通りにシンポジウムを開催することができ、目的のかなりの部分を達成できたと考えている。一方、学会内外における研究の動向把握については、WG を活用して研究レビューを行っているが、短期間では網羅的な活動は不可能であり、今後も継続的に広く研究動向をとらえる試みを実施する必要がある。</p>			

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。